

令和6年度 日本赤十字広島看護大学国際交流委員会主催特別講演会

国際活動を通じて得た経験とキャリア形成の振り返り —イラク、パレスチナ難民キャンプでの医療支援を通じて—

日 時：令和6年11月27日 13:00～14:30

場 所：日本赤十字広島看護大学202講義室

講演者：日隈 妙子（熊本赤十字病院 看護係長）

1. はじめに

幼少期、テレビで目にしたエチオピア難民や紛争被害を受けた子供たちの映像が心に残り、「自分に何かできることはないだろうか」と漠然と考えるようになった。しかし、学生時代は遊びに夢中で将来を真剣に考えることなく、安易にデパートに就職した。その後、祖母の「あなたには人の役に立つ仕事に向いている」という言葉が心に引っかかり、祖母の死後、偶然フリーペーパーで目にした老人介護の記事に涙したことが転機となり、看護師を志した。

広島赤十字・原爆病院に就職し、国際救援開発要員（以下国際要員）としての初派遣は2013年イラクに赴いた時であった。それから9年間派遣はなく、国内でスキルを磨く日々が続いた。その後レバノンに派遣され9年間の努力が現場で大いに活かされたという経験をした。これは私の成功体験を共有するものではなく、これから看護師として、また1人の医療専門職として多くの可能性を秘めている方々へのエールとして贈りたいメッセージである。

2. 幼少期の環境と留学経験

私の家庭環境は、幼少期から自然に国際的な視野を養えるものであった。1歳の頃から英語の童謡が流れる環境で育ち、初めて観た映画もハリウッド映画であった。これらの経験が、海外文化やアートへの興味を育み、中学時代にはアイドルには目を向けずハリウッドスターに憧れながら英語を学ぶようになった。

高校時代にはアメリカへの短期留学を経験した。現地の温かな人々や広大な土地に感銘を受け、一度もホームシックにかからず生活を楽しんだ。しかし、

大学時代に提携校への1年間の留学の機会を得ながら、友人との卒業を優先しこの機会を逃した。この選択は、後に深い後悔として残ることとなった。

3. 国際要員を目指したきっかけ

看護師として働き始めてから5年目に救護班に任命され、災害看護に関心を持つようになった。その後、6年目には東日本大震災が発生し、初動班として派遣された。現場での壮絶な状況に衝撃を受け、看護師としての役割を改めて考える機会となった。

また、国際要員になるためにTOEICスコアの壁に直面していたが、集中英語研修の案内を目にし、「これはチャンスだ」と感じ参加を決意した。研修受講によりスコアをクリアし必須研修を終え国際要員として登録された。その数ヶ月後、ICU/ERでの係長を任命され、要員と管理職の同時スタートとなった。

4. イラク派遣で得た教訓

初めての派遣は北イラクでの戦傷外科と熱傷治療の研修であった。ここでは戦争による銃撃や爆弾、焼身自殺などで重傷を負った患者たちが次々と運び込まれる現場に直面した。ある警官は爆弾で腹部と腕を損傷しながらも、翌日には歩行訓練を始め、その回復力と感謝の心に強く感銘を受けた。

一方で、クルド人やアラブ人など民族間に横たわる複雑な関係にも触れる機会があり、支援を行う上で歴史や背景を深く理解することの重要性を痛感した。この経験を通じて、人道支援への理解がさらに深まった。

5. 長い準備期間とスキルの蓄積

イラク派遣後、次の派遣までの9年間は、病院の建て替えや経営状況により派遣が困難な状況にあった。この間、焦りや葛藤を感じながらも、ポジティブに考え、自分のスキルを向上させることに注力した。

ICU/ER や産婦人科の専門知識を深める勉強を続け、自分が極めたい分野を見極め、その学びを深めることに注力するのが大切である。その過程で資格取得に繋がることもあるが、資格そのものが目的ではない。例えば、救急医療の分野では、基礎的なJPTEC（外傷教育プログラム）から始め、BLS（一時救命処置）やACLS（二次救命処置）など段階的にスキルをアップデートしていった。また、管理職としての経験を積み、教育体制の整備にも取り組んだ。この期間に学んだ知識やスキルが、後のレバノン派遣で大きな力となった。

6. レバノンでの活動と成果

2022年、9年ぶりにレバノンへの派遣が決まり、パレスチナ難民キャンプ内にあるパレスチナ赤新月社の病院で活動した。この事業は、2025年までに病院の体制を改善し、現地スタッフが安全で質の高い医療を持続的に提供できるよう支援することを目的としていた。

1) 現状分析と可視化の取り組み

派遣当初、現場は事業の進捗が遅れ、スタッフの多くが「日赤が何とかしてくれる」という受け身の姿勢であった。そこで、各分野の責任者との信頼関係を築きつつ、課題を可視化し、進捗状況を共有する仕組みを整えた。この改善により、日本赤十字本社や中東代表部も現場の状況を把握しやすくなり、

効率的な支援が可能となった。

2) スタッフの意識改革と主体性の育成

OJT（On the Job Training）を通じた支援や問題解決の成功体験を積ませることで、次第にスタッフ自身が「自分たちが病院を向上させ地域住民の健康を守る」という事を再認識し、主体的に行動する姿が見られるようになった。この変化が最も重要な成果の一つであった。

7. キャリア形成への教訓

人生におけるキャリア形成は早い段階で計画し、多様な経験を積むことが重要である。国際的なキャリアを目指す場合、修士号の取得や語学力の向上など、早期の準備がその後の選択肢を広げる。加えて、管理職を経験することでマネジメント能力を磨くことも重要である。

8. 終わりに

パレスチナ難民をはじめとする人々の困難な状況に触れ、国際支援活動の重要性を再認識した。現在も続く紛争が1日でも早い平和的解決を迎える事を願ってやまない。

これから医療職としてキャリアを歩まれる方々にとって私の経験が一つでもヒントになれば幸いである。自身の目標に向けて計画的に努力を重ね、充実した人生を歩まれることを心より願っている。

謝 辞

今回の講演に際し、日本赤十字広島看護大学の皆様からいただいた貴重な機会と支援に深く感謝申し上げます。